

生活保護受給者世帯における稼働年齢層の実態調査

― 板橋区との共同研究事業 基礎報告書 ―

長沼葉月・岡部 卓

1. はじめに

近年の生活保護受給世帯の増大は大きな関心を集める社会問題の一つとなっている。厚生労働省は2005（平成17）年度から、自立支援プログラムによる自立の支援を推進している。自立支援プログラムでは、「（1）管内の生活保護世帯全体の状況を把握し、（2）生活保護受給者の状況や自立阻害要因を類型化し、それぞれの類型ごとに取り組むべき自立支援の具体的内容や実施手順等を定め、（3）これに基づき個々の生活保護受給者に必要な支援を実施する」¹⁾とされている。生活保護自立支援プログラムの中で最も注力されている領域の一つが、就労支援である。ハローワークとの連携による生活保護受給者等就労支援事業が実施され、就労支援コーディネーターやナビゲータによるよりきめ細やかな支援が提供されるようになったほか、2009（平成21）年度には就労意欲喚起等支援事業が設けられ、「就労意欲や生活能力・就労能力が低いなどの就労に向けた課題をより多く抱える生活保護受給者に対して、（1）就労意欲喚起のためのカウンセリング、（2）生活能力（生活習慣・社会マナーなど）向上のための訓練、（3）就労能力（パソコン操作・機械操作など）向上のための職業訓練、（4）職業紹介、（5）就労活動支援、（6）離職防止支援など、就労意欲の喚起を図るための支援」をNPO等の民間を活用して実施できるようになった。

東京都板橋区は、保護率が比較的高い地域であり、当初から熱心に様々な生活保護自立支援プログラムの策定に取り組んでおり²⁾、高校進学支援プログラム等で一定の成果を上げてきた。また定期的に自立支援プログラムの見直しに取り組み、受給者の生活課題に即した多様なプログラムを新人ワーカーでも活

用しやすいように様々な組織改革を重ねてきた³⁾。調査の実施された2010年には、就労意欲喚起プログラム等の策定に向けて受給者の実態把握をより多面的に行うことを目的に二つの調査を行った。一つはケースワーカーによる調査であり、もう一つが受給者本人への質問紙調査である。このような生活保護受給者に対する悉皆調査は極めてまれなものであり、特にメンタルヘルスまで視野に入れた調査は管見の限り全国初の試みであり、貴重な基礎資料と言える。本報告はこの受給者を対象とする自己記入式質問紙調査の基礎集計報告である。

2. 研究方法

本調査は板橋区における自立支援プログラムの拡充に向けた基礎資料の収集のために取り組まれたものである。対象者は2010年4月現在で16歳から64歳までの稼働年齢層の受給者すべてである。調査項目の選定に際しては板橋区福祉事務所の担当チームと首都大学東京の岡部卓・長沼葉月とで複数回協議を重ねた。対象者の基本属性に加えて、就労に影響すると考えられた健康状態、活動状況、ソーシャルサポート、メンタルヘルス、就労の有無、就労に向けての活動、就労意向、就労スキル、職業選択意識、職業への期待に関する設問項目を設定した。

調査は無記名式自己記入式質問紙法で行われた。調査は板橋区から委託を受けた調査会社が2011年10月から11月にかけて実施し、郵送法で回収した。対象である稼働年齢層の被保護者全数7652人のうち、3152票分のデータベースを分析用に提供された(回収率41.2%)。

3. 結果

3.1 回答者の基本属性

表1に回答者の基本属性を示す。年齢に関しては男女とも40代以上が多いが、女性では10代～30代も一定割合みられる。学歴に関しては中学卒業(高校中退を含む)程度が約4割弱と比較的多い。短大卒・大卒以上の学歴は1割に満

表1 回答者の基本属性

		合計		性別						子ども時代保護歴			
				男		女		不明		子ども期の保護歴あり		子ども期の保護歴なし	
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
年齢	10代	119	3.8%	49	2.8%	70	5.3%	0	0.0%	106	27.0%	10	0.4%
	20代	135	4.4%	48	2.8%	87	6.6%	0	0.0%	45	11.5%	86	3.3%
	30代	404	13.1%	144	8.3%	253	19.2%	7	20.6%	50	12.7%	349	13.3%
	40代	718	23.2%	354	20.3%	357	27.1%	7	20.6%	68	17.3%	627	23.9%
	50代	822	26.6%	539	30.9%	274	20.8%	9	26.5%	64	16.3%	741	28.2%
	60代	896	29.0%	611	35.0%	274	20.8%	11	32.4%	60	15.3%	811	30.9%
最終 学歴	中学卒業	816	25.9%	505	28.7%	300	22.7%	11	14.7%	148	37.5%	634	24.0%
	高校中退	415	13.2%	237	13.5%	175	13.3%	3	4.0%	54	13.7%	357	13.5%
	高校卒業	1029	32.6%	516	29.4%	500	37.9%	13	17.3%	115	29.1%	897	34.0%
	専門学校中退	78	2.5%	39	2.2%	37	2.8%	2	2.7%	3	0.8%	75	2.8%
	専門学校卒業	237	7.5%	106	6.0%	130	9.9%	1	1.3%	25	6.3%	210	8.0%
	短期大学・大学中退	121	3.8%	94	5.3%	26	2.0%	1	1.3%	3	0.8%	117	4.4%
	短期大学・大学卒業	287	9.1%	199	11.3%	85	6.4%	3	4.0%	4	1.0%	282	10.7%
	大学院中退	4	0.1%	1	0.1%	3	0.2%	0	0.0%	2	0.5%	2	0.1%
	大学院修了	15	0.5%	7	0.4%	8	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	14	0.5%
	その他	81	2.6%	40	2.3%	41	3.1%	0	0.0%	33	8.4%	40	1.5%
	無回答	69	2.2%	14	0.8%	14	1.1%	41	54.7%	8	2.0%	10	0.4%
子ども 時代保 護歴	受給歴あり	395	13.0%	200	11.6%	193	15.1%	2	6.9%				
	受給歴なし	2638	87.0%	1522	88.4%	1089	84.9%	27	93.1%				
現在の 就労状 況	就労中	576	18.3%	227	12.9%	341	25.9%	8	10.7%	62	15.7%	503	19.1%
	未就労	2332	74.0%	1387	78.9%	902	68.4%	43	57.3%	313	79.2%	1946	73.8%
	無回答	244	7.7%	144	8.2%	76	5.8%	24	32.0%	20	5.1%	189	7.2%

たない。子ども時代に生活保護を受給していた経験のあるものは、男性で11.6%、女性で15.1%であった。回答者のうち現在就労中のものが18.3%であり、74.0%は現在未就労であった。男性の就労者は12.9%であったのに対し女性では25.9%が就労しており、男性より女性で生活保護を受給しつつも就労している割合が高かった。

また子ども時代生活保護受給歴（保護歴）で比較したところ、保護歴ありの群では、そうでない群と比べて10代や20代の割合が高く、また「中学卒業」の割合が高く、高校卒業以上の学歴のものが低かった。また現在就労中のものの割合が低かった。したがって、本回答者のうち子ども時代に保護歴ありとしている群の3割程度は生活保護受給世帯で大きくなり、引き続き親と共に同居して学校に通っている等の状態のものであると想定される。一方で40歳代、50歳代、60歳代のそれぞれの年代にも15%以上が分布しており、貧困の再生産の根深さもうかがえる。

3.2 暮らしの様子

1) 全体的な生活の質

生活の質（QOL）を測定するための既存の尺度を参考に、過去1ヶ月間の生活状況について身体健康、身体的にみた日常生活動作、身体的にみた手段的日常生活動作、精神健康、精神的にみた日常生活、精神的にみた手段的日常生活動作、家族との交流、友人との交流のそれぞれについて主観的に評価する設問を設けた。回答は「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法による評価とした。結果を表2に示す。

生活の質の評価はそれぞれ多様であったが、「不安を感じたり気分が落ち込む等心理的な問題に苦しんだ」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた割合が合わせて63.1%に達しており、回答者の大半が何らかの心理的な問題を抱えて苦しんでいることがうかがえる。

表2 過去1ヶ月間の生活状況

	とてもあてはまる		まああてはまる		あまりあてはまらない		全くあてはまらない		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 全体的にみた身体的な健康状態は良かった	283	9.0%	1054	33.4%	1241	39.4%	478	15.2%	96	3.0%
(イ) 歩いたり階段をのぼったりするのが身体的に苦しくてできなかった	337	10.7%	1035	32.8%	1003	31.8%	693	22.0%	84	2.7%
(ウ) 体の具合が悪くて、家事や日常の活動がほとんどできなかった	245	7.8%	841	26.7%	1245	39.5%	725	23.0%	96	3.0%
(エ) 全体的には、気持ちの上では元気だった	368	11.7%	1182	37.5%	1053	33.4%	449	14.2%	100	3.2%
(オ) 不安を感じたり、気分が落ち込むなど心理的な問題に苦しんだ	854	27.1%	1135	36.0%	716	22.7%	356	11.3%	91	2.9%
(カ) 心理的な問題で、家事や日常の活動がほとんどできなかった	256	8.1%	814	25.8%	1284	40.7%	702	22.3%	96	3.0%
(キ) 家族とふだん通りに会ったり話したりした	552	17.5%	876	27.8%	547	17.4%	976	31.0%	201	6.4%
(ク) 友人とふだん通りに会ったり話したりした	455	14.4%	879	27.9%	811	25.7%	905	28.7%	102	3.2%

表3に「とてもあてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答したものの割合を、男女別・年代別・最終学歴別に表示する。

表 3-1 性別・年代別・子ども時代の保護歴別にみた生活の質

	性別				年齢 3 区分						子ども時代保護歴			
	男 (N=1758)		女 (N=1319)		39 歳以下 (N=758)		40 ～ 54 歳 (N=1043)		55 ～ 65 歳 (N=1393)		保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 全体的にみた身体的な健康状態は良かった	745	42.4	569	43.1	361	54.9	435	41.7	525	37.7	205	51.9	1095	41.5
(イ) 歩いたり階段をのぼったりするのが身体的に苦しくてできなかった	788	44.8	561	42.5	186	28.3	446	42.8	721	51.8	139	35.2	1187	45.0
(ウ) 体の具合が悪くて、家事や日常の活動がほとんどできなかった	556	31.6	507	38.4	201	30.5	398	38.2	471	33.8	119	30.1	922	35.0
(エ) 全体的には、気持ちの上では元気だった	896	51.0	629	47.7	335	50.9	448	43.0	749	53.8	196	49.6	1307	49.5
(オ) 不安を感じたり、気分が落ち込むなど心理的な問題に苦しんだ	1096	62.3	856	64.9	429	65.2	699	67.0	840	60.3	244	61.8	1688	64.0
(カ) 心理的な問題で、家事や日常の活動がほとんどできなかった	562	32.0	482	36.5	221	33.6	410	39.3	426	30.6	134	33.9	891	33.8
(キ) 家族とふだん通りに会ったり話したりした	574	32.7	839	63.6	458	69.6	514	49.3	441	31.7	238	60.3	1150	43.6
(ク) 友人とふだん通りに会ったり話したりした	665	37.8	652	49.4	360	54.7	407	39.0	554	39.8	196	49.6	1094	41.5

表 3-2 学歴・現在の就労状況別にみた生活の質

	学歴カテゴリ ⁴⁾								就労有無 ⁵⁾						全体 (N=3152)	
	中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校 卒以上 (N=543)		その他・無 回答		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)					
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%		
(ア) 全体的にみた身体的な健康状態は良かった	506	41.1	545	44.4	224	41.3	62	41.3	872	37.4	367	63.7	1337	42.4		
(イ) 歩いたり階段をのぼったりするのが身体的に苦しくてできなかった	589	47.8	527	42.9	206	37.9	50	33.3	1109	47.6	169	29.3	1372	43.5		
(ウ) 体の具合が悪くて、家事や日常の活動がほとんどできなかった	438	35.6	405	33.0	202	37.2	41	27.3	894	38.3	117	20.3	1086	34.5		
(エ) 全体的には、気持ちの上では元気だった	607	49.3	615	50.1	261	48.1	67	44.7	1061	45.5	377	65.5	1550	49.2		
(オ) 不安を感じたり、気分が落ち込むなど心理的な問題に苦しんだ	798	64.8	778	63.4	342	63.0	71	47.3	1555	66.7	297	51.6	1989	63.1		
(カ) 心理的な問題で、家事や日常の活動がほとんどできなかった	436	35.4	421	34.3	172	31.7	41	27.3	880	37.7	115	20.0	1070	33.9		
(キ) 家族とふだん通りに会ったり話したりした	538	43.7	596	48.5	221	40.7	73	48.7	978	41.9	367	63.7	1428	45.3		
(ク) 友人とふだん通りに会ったり話したりした	529	43.0	526	42.8	208	38.3	71	47.3	880	37.7	359	62.3	1334	42.3		

男女別の比較で大きな違いがあったのは対人交流に関する二つの設問であり、特に「家族とふだん通りに会ったり話したりした」が男性では 32.7% にとどまるのに対し、女性では 63.6% に達している。生活保護受給者でも女性は比較的家族との交流が保たれるのに対し、男性では 6 割以上が家族との交流関係が停滞すると考えられる。

年代では、当然ではあるが 30 代以下では身体的な健康度が比較的高いのに対し、年代が上がるにつれて身体的健康度は低下して行く。しかし心理的な問題で苦しんだという割合はどの年代でも 6 割に達している。また家族や友人との交流関係は 30 代以下の世代の方が多く、高齢になるほど孤立傾向を高めることが示唆される。

子ども時代の保護歴の有無では、保護歴のある群はそうでない群より身体的な健康度が良いものの割合が多く、また家族との交流が保たれているものの割合も多かった。

学歴別の差異はほとんどみられなかったが、「歩いたり階段をのぼったりするのが身体的に苦しくてできなかった」が中卒程度で高く、専門学校卒以上と比べて 10 ポイントの差がついた。

就労の有無については、すべての項目で大きな差が見られ、「就労あり」の群は「不就労」の群と比べて心身の健康度や対人交流においていずれも良好な状態であった。これについては健康で対人交流に恵まれているために就労に至ったとも、就労しているからこそ心身の健康や対人交流の質が保たれているとも考えられる。

2) ソーシャルサポート・ネットワーク

次に、ソーシャルサポートに関する設問の結果を示す。ソーシャルサポートについては、「次のような問題で援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか」と問いかけ、「問題を抱えて落ち込んだ時」と「病気で手助けが必要な時」の 2 つの場面について「配偶者」「親族」「自分の子ども」「友人・同僚」「近所・地域」「専門家・サービス機関」「誰もいない」の中から該当するものを複数回答で選択してもらった。選択されたものの割合を、表 4-1、4-2 にまとめた。

表 4-1 性別・年代別・子ども時代の保護歴別にみた援助が必要な時頼る相手

		性別				年齢 3 区分								子ども時代保護歴			
		男 (N=1758)		女 (N=1319)		39歳以下 (N=758)		40～54歳 (N=1043)		55～65歳 (N=1393)		保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)			
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
問題を 抱えて 落ち込 んだ時	配偶者	153	8.7	154	11.7	71	10.8	118	11.3	121	8.7	40	10.1	257	9.7		
	親族	343	19.5	401	30.4	259	39.4	258	24.7	225	16.2	132	33.4	598	22.7		
	自分の子ども	43	2.4	250	19.0	42	6.4	132	12.7	120	8.6	28	7.1	258	9.8		
	友人・同僚	396	22.5	419	31.8	256	38.9	276	26.5	289	20.7	131	33.2	672	25.5		
	近所・地域	92	5.2	89	6.7	25	3.8	62	5.9	94	6.7	18	4.6	155	5.9		
	専門家・サービス機関	399	22.7	276	20.9	134	20.4	246	23.6	295	21.2	76	19.2	587	22.3		
	誰もいない	630	35.8	259	19.6	136	20.7	310	29.7	450	32.3	92	23.3	792	30.0		
病気等 で手助 けが必 要な時	配偶者	118	6.7	129	9.8	65	9.9	90	8.6	93	6.7	32	8.1	206	7.8		
	親族	481	27.4	501	38.0	351	53.3	340	32.6	294	21.1	179	45.3	788	29.9		
	自分の子ども	56	3.2	244	18.5	36	5.5	131	12.6	137	9.8	30	7.6	266	10.1		
	友人・同僚	211	12.0	204	15.5	136	20.7	143	13.7	136	9.8	66	16.7	337	12.8		
	近所・地域	87	4.9	66	5.0	30	4.6	55	5.3	65	4.7	25	6.3	124	4.7		
	専門家・サービス機関	400	22.8	271	20.5	113	17.2	256	24.5	302	21.7	75	19.0	588	22.3		
	誰もいない	630	35.8	283	21.5	138	21.0	316	30.3	471	33.8	84	21.3	826	31.3		

表 4-2 学歴別・就労有無別及び全体での援助が必要な時頼る相手

		学歴カテゴリ						就労有無				全体 (N=3152)	
		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校卒 以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)			
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
問題を 抱えて 落ち込 んだ時	配偶者	131	10.6%	106	8.6%	57	10.5%	230	9.9%	68	11.8%	318	10.1%
	親族	271	22.0%	301	24.5%	140	25.8%	546	23.4%	155	26.9%	749	23.8%
	自分の子ども	115	9.3%	108	8.8%	61	11.2%	196	8.4%	81	14.1%	298	9.5%
	友人・同僚	288	23.4%	357	29.1%	147	27.1%	532	22.8%	244	42.4%	824	26.1%
	近所・地域	81	6.6%	75	6.1%	23	4.2%	141	6.0%	32	5.6%	185	5.9%
	専門家・サービス機関	214	17.4%	307	25.0%	142	26.2%	543	23.3%	92	16.0%	683	21.7%
	誰もいない	391	31.8%	324	26.4%	160	29.5%	726	31.1%	128	22.2%	905	28.7%
病気等 で手助 けが必 要な時	配偶者	107	8.7%	85	6.9%	44	8.1%	180	7.7%	53	9.2%	252	8.0%
	親族	334	27.1%	424	34.5%	180	33.1%	729	31.3%	210	36.5%	990	31.4%
	自分の子ども	115	9.3%	118	9.6%	61	11.2%	205	8.8%	86	14.9%	311	9.9%
	友人・同僚	150	12.2%	175	14.3%	75	13.8%	273	11.7%	117	20.3%	416	13.2%
	近所・地域	61	5.0%	66	5.4%	24	4.4%	110	4.7%	30	5.2%	153	4.9%
	専門家・サービス機関	223	18.1%	291	23.7%	143	26.3%	517	22.2%	116	20.1%	678	21.5%
	誰もいない	402	32.7%	343	27.9%	162	29.8%	726	31.1%	150	26.0%	934	29.6%

「問題を抱えて落ち込んだ時」については、「誰もいない」が最も多く 28.7%、ついで「友人・同僚」が 26.1%、「親族」が 23.8% と続いた。「病気等で手助けが必要な時」については「親族」が最も多く 31.4%、「誰もいない」が 29.6%、「専門家・サービス機関」が 21.5% と続いた。病気等の場合には親族の力を借りるものが増えるが、どちらの場合にも「誰もいない」との回答が 3 割近くに達している。

性別にみると、「問題を抱えて落ち込んだ時」では男性より女性で「親族」「自分の子ども」「友人・同僚」に相談するものが多いが、男性では「誰もいない」が多い。「病気等で手助けが必要な時」では男性も「親族」に頼るものが27.4%と増えているものの、女性の方が「親族」「自分の子ども」の割合が高くなっている。全般的にみて男性より女性の方が他者の支援を求める傾向が強い。

年代別にみると「病気等で手助けが必要な時」では「問題を抱えて落ち込んだ時」と比べて特に30代以下で「親族」に相談するものの割合が高い。またどちらの項目でも、年代が上がるにつれ「親族」や「友人・同僚」の割合が低下し、「誰もいない」の割合が増加する。

子ども時代の保護歴別では、どちらの項目でも保護歴のある群でそうでない群より「誰もいない」の割合が低く、「親族」「友人・同僚」の割合が高かった。子ども時代に保護歴のある方が、親族や友人との関係が保たれやすい傾向ののだろうか。

学歴別では、どちらの設問でも学歴が上がるほど「専門家・サービス機関」の割合が高くなる。学歴が低い場合には適切な専門家やサービス機関の情報を良く知らないのに対し、学歴が上がるほど制度やサービスについての正しい知識が増える可能性がある。

就労の有無別では、就労中の方がどちらの場合でも「友人・同僚」の割合が高かったほか、「誰もいない」の割合が低くなっていた。就労中の場合には仕事の関係で同僚に相談する機会が増える等、様々な形で他者の力を借りながら就労を続けている様子が見えてくる。

3) 今後の見通し (将来展望)

表5 今後の見通し

	そう思う		まあ そう思う		あまりそう 思わない		全くそう 思わない		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア)安定した仕事をしている	314	10.0%	604	19.2%	937	29.7%	1004	31.9%	293	9.3%
(イ)家族と穏やかに暮らしている	487	15.5%	736	23.4%	567	18.0%	1038	32.9%	324	10.3%
(ウ)友達と楽しく交流して暮らしている	446	14.1%	871	27.6%	843	26.7%	806	25.6%	186	5.9%
(エ)この街で満足して暮らし続けている	690	21.9%	1275	40.5%	752	23.9%	308	9.8%	127	4.0%

今後の見通しについて、「就労」「家族交流」「対人交流」「地域生活」のそれぞれについて肯定的な見通し観を提示し、それぞれについて「そう思う」から「全くそう思わない」までの4件法で尋ねた結果を表5に示す。もっとも「そう思う」の割合が高かったのは「この街で満足して暮らし続けている」の21.9%であった。「安定した仕事をしている」については、「全くそう思わない」が31.9%、「そう思わない」が29.7%に達しており、約6割が仕事をしている見通しを持っていないことが明らかになった。

今後の見通しについての回答のうち「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた割合を、基本属性別にクロス集計を行ったものを表6-1,6-2に示す。

表6-1 性別・年齢別にみた今後の見通し

	合計		性別				年齢3区分					
			男 (N=1758)		女 (N=1319)		39歳以下 (N=758)		40～54歳 (N=1043)		55～65歳 (N=1393)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 安定した仕事をしている	918	29.1	490	27.9	412	31.2	273	41.5	342	32.8	293	21.0
(イ) 家族と穏やかに暮らしている	1223	38.8	502	28.6	704	53.4	413	62.8	441	42.3	354	25.4
(ウ) 友達と楽しく交流して暮らしている	1317	41.8	634	36.1	663	50.3	381	57.9	440	42.2	482	34.6
(エ) この街で満足して暮らし続けている	1965	62.3	1104	62.8	830	62.9	421	64.0	636	61.0	887	63.7

表6-2 子ども時代の保護歴・学歴・就労有無別にみた今後の見通し

	子ども時代保護歴				学歴カテゴリ						就労有無			
	保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校 卒以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 安定した仕事をしている	130	32.9	765	29.0	346	28.1	351	28.6	186	34.3	590	25.3	272	47.2
(イ) 家族と穏やかに暮らしている	215	54.4	966	36.6	474	38.5	494	40.2	191	35.2	832	35.7	311	54.0
(ウ) 友達と楽しく交流して暮らしている	200	50.6	1078	40.9	475	38.6	535	43.6	246	45.3	907	38.9	330	57.3
(エ) この街で満足して暮らし続けている	249	63.0	1655	62.7	789	64.1	765	62.3	334	61.5	1415	60.7	414	71.9

全体的には「この街で満足して暮らし続けている」が約6割と比較的高い。

性別では、「家族と穏やかに暮らしている」や「友達と楽しく交流して暮らしている」において男女で10ポイント以上の大きな差があり、女性は約半数が家族や友人との交流に対して肯定的な見通しを持っているのに対し、男性では過半数が悲観的な見通しを示した。

年代別では「安定した仕事をしている」「家族と穏やかに暮らしている」「友達と楽しく交流して暮らしている」の3項目で年代が上がるにつれて「そう思う」の回答が減る。年齢を重ねるほど就労が困難になる世相や、家族との交流が途絶えがちになる現状を反映しているかもしれない。

子ども時代の保護歴別では、保護歴のある群の方が「家族と穏やかに暮らしている」「友達と楽しく交流して暮らしている」で「そう思う」の割合が高い。これまでの結果と一致しており、生活保護受給歴のある群では家族や友人との関係が保たれているのに対し、そうでない群では交流途絶傾向があるのではないだろうか。

学歴については、「安定した仕事をしている」が専門学校卒以上では34.3%と一定程度見られるのに対し、高卒以下では28%程度と少なくなっている。

現在の就労の有無では、4項目すべてにおいて10ポイント以上の大きな差がみられており、現在就労できている人は今後について肯定的な見通しを抱きやすくなることが示された。

4) メンタルヘルス

メンタルヘルスに関する設問にはK6/K10を用いた。K6/K10は元々米国における精神保健疫学研究の一貫として開発された一般人口中の精神健康度のスクリーニング用のチェックリストであり⁶⁾、日本語版の妥当性も示されている⁷⁾。K10は10項目の尺度であり、K6はそのうちの6項目からなる短縮版であり、平成22年度の国民生活基礎調査にも「心の健康」の指標として採用された。本研究では10項目版を用いて調査を行った。

設問のうち、「いつも」との回答が多いのは「自分は価値のない人間だと感じましたか」「理由もなく疲れ切ったように感じましたか」「神経過敏に感じましたか」であった。

なおK6/K10は、5件法で合計得点を算出し、精神的健康度のスクリーニングに用いることができる。K6項目で合計得点を算出し、平成22年度の国民生活基礎調査の結果と比較したものを図1に示す(なお古川ら(2003)ではK6の得点化に際し1点～5点の5件法を採用し15点をカットオフポイントとしてい

表7 K10 各項目の度数分布

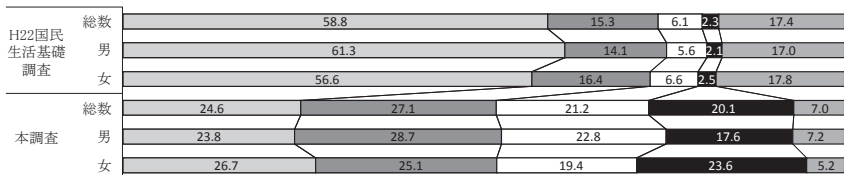
K6/K10 項目 ⁸⁾	全くない		少しだけ		ときどき		たいてい		いつも		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(1) 理由もなく疲れ切ったように感じましたか	288	9.1%	688	21.8%	1048	33.2%	497	15.8%	421	13.4%	210	6.7%
(2) 神経過敏に感じましたか	467	14.8%	735	23.3%	843	26.7%	438	13.9%	432	13.7%	237	7.5%
(3) どうしても、落ち着けないくらいに、神経過敏に感じましたか	802	25.4%	714	22.7%	783	24.8%	322	10.2%	290	9.2%	241	7.6%
(4) 絶望的だと感じましたか	907	28.8%	753	23.9%	706	22.4%	258	8.2%	295	9.4%	233	7.4%
(5) そわそわ、落ち着かなく感じましたか	822	26.1%	857	27.2%	763	24.2%	264	8.4%	199	6.3%	247	7.8%
(6) じっと座っていられないほど、落ち着かなく感じましたか	1224	38.8%	809	25.7%	594	18.8%	186	5.9%	111	3.5%	228	7.2%
(7) ゆうつに感じましたか	510	16.2%	911	28.9%	740	23.5%	383	12.2%	384	12.2%	224	7.1%
(8) 気分が沈みこんで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか	638	20.2%	799	25.3%	775	24.6%	388	12.3%	331	10.5%	221	7.0%
(9) 何をするのも骨折りだと感じましたか	744	23.6%	847	26.9%	708	22.5%	372	11.8%	248	7.9%	233	7.4%
(10) 自分は価値のない人間だと感じましたか	793	25.2%	707	22.4%	680	21.6%	287	9.1%	455	14.4%	230	7.3%

るが、国民生活基礎調査では0点～4点で得点化しているため、本図では同様に0点～4点で得点化した場合の合計点を示した。この場合、カットオフポイントは9点となる、つまり9点以上のもののうち50%には何らかの精神科的な課題があると推定される)。

本調査結果の対象者は、平成22年度国民生活基礎調査結果と比べて10点以上の者の割合が圧倒的に高く、15点を超えるものも少なくなかった。抑うつや不安等、何らかの治療や支援を要するものが多く含まれていることがこの結果からも示唆される。

図1 「こころの状態」(K6) 得点分布

□0～4点 ■5～9点 □10～14点 ■15点以上 □不詳



K10を地域住民のスクリーニングに用いる際には、7点以上が「要注意」、15点以上が「気分障害・不安障害の可能性」とされる⁹⁾。その基準に合わせて回答を分類し、属性別に比較を行った。結果を表 8-1, 8-2 に示す。

表 8-1 全体・性別・年代別にみたメンタルヘルス

K10 カテゴリ	全体		性別				年齢 3 区分					
			男 (N=1758)		女 (N=1319)		39 歳以下 (N=758)		40 ～ 54 歳 (N=1043)		55 ～ 65 歳 (N=1393)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
一般範囲	663	21.0%	356	20.3%	303	23.0%	177	26.9%	186	17.8%	296	21.2%
要注意	858	27.2%	519	29.5%	321	24.3%	157	23.9%	262	25.1%	425	30.5%
気分・不安障害の可能性あり	1449	46.0%	782	44.5%	639	48.4%	302	45.9%	551	52.8%	579	41.6%
無回答	182	5.8%	101	5.7%	56	4.2%	22	3.3%	44	4.2%	93	6.7%

表 8-2 子ども時代の保護歴別・学歴別・就労有無別にみたメンタルヘルス

K10 カテゴリ	子ども時代保護歴				学歴カテゴリ						就労有無			
	保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校卒 以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
一般範囲	103	26.1%	539	20.4%	255	20.7%	242	19.7%	129	23.8%	444	19.0%	205	35.6%
要注意	103	26.1%	734	27.8%	343	27.9%	348	28.3%	138	25.4%	646	27.7%	186	32.3%
気分・不安障害可能性あり	171	43.3%	1229	46.6%	562	45.7%	583	47.5%	252	46.4%	1229	52.7%	183	31.8%
無回答	18	4.6%	136	5.2%	71	5.8%	55	4.5%	24	4.4%	13	0.6%	2	0.3%

全体のうち、46.0%が「気分障害ないしは不安障害の可能性あり」とされる高得点に達しており、多くがメンタルヘルスに大きな課題を抱えていることが明らかになった。

性別や学歴別では大きな差がみられなかった。年代別では特に 40 歳から 54 歳の群で「気分障害ないしは不安障害の可能性あり」が 52.8%と高くなっていた。子ども時代の保護歴については、ない群で「一般範囲」のものは 20.4%に過ぎず、保護経験がない方がメンタルヘルス上の課題を抱えやすいことが示唆された。また現在就労中の群では「一般範囲」が 35.6%と最多で会ったのに対し、就労していない群では「気分障害ないしは不安障害の可能性あり」が 52.7%と最多であり、就労にメンタルヘルスの問題が深く関係していることが示唆された。メンタルヘルスの問題があるから就労できていないとも、就労を通じて自己評価が向上しメンタルヘルスの問題が改善したとも考えられ、さらなる検討が必要である。

3.3 仕事について

1) 就労状況

就労状況に関する設問に対して無回答であった 144 名を除外し、基本属性別に就労の有無を比較した。

表 9 基本属性別にみた就労の有無

		就労有無			
		不就労		就労あり	
		度数	%	度数	%
全体		2332	80.2%	576	19.8%
性別	男	1387	85.9%	227	14.1%
	女	902	72.6%	341	27.4%
	不明	43	84.3%	8	15.7%
年齢 3 区分	39 歳以下	461	73.6%	165	26.4%
	40 ～ 54 歳	763	77.5%	222	22.5%
	55 歳～ 65 歳	1081	85.5%	183	14.5%
子ども時代保護歴	子ども期の保護歴あり	313	83.5%	62	16.5%
	子ども期の保護歴なし	1946	79.5%	503	20.5%
学歴カテゴリ	中卒程度	959	84.5%	176	15.5%
	高卒程度	875	76.0%	277	24.0%
	専門学校卒以上	401	78.9%	107	21.1%
	その他・無回答	97	85.8%	16	14.2%

回答者全体のうち 8 割が就労していない状態であった。就労中のものは男性では 14.1% であったのに対し女性では 27.4% が就労していた。また年代が上がるにつれて就労率は低下し、39 歳以下では 26.4% であったが 55 歳以上では 14.5% にまで低下した。子ども時代に保護歴がある群では 16.5% であったがいない群では 20.5% であり、保護歴がない群の方がやや就労率は高かった。また学歴では中卒程度が 15.5% となっており、高卒以上と比べて低くなっていた。

2) 就労していないものの状況

現在仕事で収入を得ていない人に対し、就労していない理由を「求職中だが条件に合わない」「病気やけがのため」「障がいのため」「学校に通っているため」「その他」の選択肢から一つ選んでもらった結果を、表 10 にまとめる。

就労していない理由で最も多かったのが「病気やけがのため」であり 49.7% に達していた。次いで「求職中だが条件に合わない」が 16.7%、「障がいのため」が 14.2% と続いた。

表 10 基本属性にみた就労していない理由

		いまお仕事をしていらない理由											
		求職中だが 条件にあわない		病気や けがのため		障がいの ため		学校に通っ ているため		その他		無回答	
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
全体		389	16.7%	1158	49.7%	332	14.2%	77	3.3%	237	10.2%	139	6.0%
性別	男	272	19.6%	688	49.6%	213	15.4%	31	2.2%	114	8.2%	69	5.0%
	女	113	12.5%	452	50.1%	108	12.0%	45	5.0%	119	13.2%	65	7.2%
	不明	4	9.3%	18	41.9%	11	25.6%	1	2.3%	4	9.3%	5	11.6%
年齢	39 歳以下	99	21.5%	168	36.4%	43	9.3%	71	15.4%	62	13.4%	18	3.9%
3 区分	40 ～ 54 歳	145	19.0%	376	49.3%	117	15.3%	4	.5%	76	10.0%	45	5.9%
	55 歳 ～ 65 歳	143	13.2%	600	55.5%	166	15.4%	0	.0%	98	9.1%	74	6.8%
子ども時代	保護歴あり	40	12.8%	124	39.6%	30	9.6%	65	20.8%	33	10.5%	21	6.7%
保護歴	保護歴なし	341	17.5%	994	51.1%	291	15.0%	8	.4%	200	10.3%	112	5.8%
学歴	中卒程度	147	15.3%	467	48.7%	145	15.1%	31	3.2%	99	10.3%	70	7.3%
カテゴリ	高卒程度	161	18.4%	451	51.5%	111	12.7%	13	1.5%	88	10.1%	51	5.8%
	専門学校卒以上	75	18.7%	208	51.9%	61	15.2%	5	1.2%	40	10.0%	12	3.0%
	その他・無回答	6	6.2%	32	33.0%	15	15.5%	28	28.9%	10	10.3%	6	6.2%

男女別では、どちらも「病気やけがのため」が約半数を占めていたが、「求職中だが条件に合わない」が男性では 19.6%、女性では 12.5% で男性の方が高かった。

年代別では、「病気やけがのため」や「障がいのため」が年代が上がるとともに多くなっており、55 歳から 65 歳では合わせて 70% に達していた。

子ども時代の保護歴では、保護歴のある群では「学校に通っているため」が 20.8% と高かった。保護歴のない群ではある群と比べて「病気やけがのため」や「障がいのため」が 10 ポイント以上高くなっていた。

学歴別では大きな差がみとめられなかった。

表 11 属性別にみた離職した時期

		一番最近、お仕事をなさっていたのはいつまでですか？											
		1カ月前まで		半年前まで		一年前まで		数年前まで		働いたことが がない		無回答	
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
全体		48	2.1%	179	7.7%	263	11.3%	1441	61.8%	229	9.8%	172	7.4%
性別	男	27	1.9%	110	7.9%	179	12.9%	877	63.2%	112	8.1%	82	5.9%
	女	21	2.3%	67	7.4%	80	8.9%	539	59.8%	110	12.2%	85	9.4%
年齢	39歳以下	19	4.1%	51	11.1%	63	13.7%	211	45.8%	91	19.7%	26	5.6%
3区分	40～54歳	22	2.9%	71	9.3%	80	10.5%	491	64.4%	45	5.9%	54	7.1%
	55歳～65歳	7	.6%	55	5.1%	118	10.9%	723	66.9%	89	8.2%	89	8.2%
子ども時代	保護歴あり	8	2.6%	22	7.0%	27	8.6%	145	46.3%	85	27.2%	26	8.3%
保護歴	保護歴なし	38	2.0%	150	7.7%	235	12.1%	1252	64.3%	135	6.9%	136	7.0%
学歴	中卒程度	13	1.4%	57	5.9%	106	11.1%	570	59.4%	128	13.3%	85	8.9%
カテゴリ	高卒程度	27	3.1%	82	9.4%	104	11.9%	561	64.1%	44	5.0%	57	6.5%
	専門学校卒以上	7	1.7%	37	9.2%	49	12.2%	267	66.6%	21	5.2%	20	5.0%

就労していない者に対して「一番最近、お仕事をなさっていたのはいつまでですか」と尋ねて直近の離職時期を調査した。結果を表 11 に示す。

全体として「働いたことがない」は 9.8% にとどまっており、最も多いのが「数年前まで」の 61.8% であった。本調査では保護開始時期を把握していないため、離職時期と保護開始時期の関連は不明瞭である。

性別では大きな差はみられなかった。年齢区分では、39 歳未満で「数年前まで」の回答が比較的少なく 45.8% にとどまっており、「働いたことがない」も 19.7% みられた。一方で 40 歳～54 歳や 55 歳以上では、「数年前まで」が 6 割を超えていた。子ども時代の保護歴では「保護歴あり」の群のうち「数年前まで」は 46.3% にとどまり、「働いたことがない」が 27.2% に達していた。学歴別では「中卒程度」で「働いたことがない」が 13.3% とやや多かった。「専門学校卒以上」では「数年前まで」が 66.6% と高くなっていた。

表 12 就労希望

		いま、働きたいと思っていらっしゃいますか？									
		どんな条件でも いいから働きたい		条件が整えば 働きたい		いつかは 働きたい		働きたくない		無回答	
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
全体		107	4.6%	940	40.3%	810	34.7%	261	11.2%	214	9.2%
性別	男	71	5.1%	616	44.4%	469	33.8%	139	10.0%	92	6.6%
	女	34	3.8%	310	34.4%	329	36.5%	117	13.0%	112	12.4%
年齢 3 区分	39 歳以下	27	5.9%	229	49.7%	150	32.5%	27	5.9%	28	6.1%
	40 ～ 54 歳	27	3.5%	312	40.9%	291	38.1%	75	9.8%	58	7.6%
	55 歳～65 歳	53	4.9%	394	36.4%	359	33.2%	155	14.3%	120	11.1%
子ども時代 保護歴	保護歴あり	18	5.8%	121	38.7%	107	34.2%	35	11.2%	32	10.2%
	保護歴なし	86	4.4%	797	41.0%	679	34.9%	215	11.0%	169	8.7%
学歴	中卒程度	54	5.6%	358	37.3%	326	34.0%	121	12.6%	100	10.4%
カテゴリ	高卒程度	38	4.3%	360	41.1%	309	35.3%	97	11.1%	71	8.1%
	専門学校卒以上	14	3.5%	189	47.1%	143	35.7%	33	8.2%	22	5.5%

就労していないものに対して就労の希望を尋ねた結果を表 12 にまとめた。全体として「働きたくない」と回答したものは 11.2% にとどまっていた。最も多かったのは「条件が整えば働きたい」の 40.3%、ついで「いつかは働きたい」の 34.7% であった。

男女別では「条件が整えば働きたい」が女性で 34.4% であったのに対し男性では 44.4% と高くなっていた。年代別では若い世代ほど「条件が整えば働きたい」が多く、39 歳以下では 49.7% であったが、55 歳以上では 36.4% にまで低下する。

「働きたくない」は逆に 39 歳以下では 5.9%、40～54 歳でも 9.8%しかいないが、55 歳以上では 14.3%に達する。子ども時代の保護歴の有無別では就労希望に差はみられなかった。また学歴別では、「条件が整えば働きたい」が学歴が高くなるほど高く、中卒程度では 37.3%であったものが専門学校卒以上では 47.1%に達していた。

表 13-1 現在の就職に向けての取り組み（複数回答）

	全体 (N=2332)		性別				年齢 3 区分					
			男 (N=1387)		女 (N=902)		39 歳以下 (N=461)		40～54 歳 (N=763)		55 歳～65 歳 (N=1081)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
アルバイト・パートの情報収集	767	32.9%	465	33.5%	296	32.8%	190	41.2%	285	37.4%	290	26.8%
ハローワークへの相談	352	15.1%	286	20.6%	61	6.8%	60	13.0%	145	19.0%	144	13.3%
福祉事務所での相談	194	8.3%	138	9.9%	53	5.9%	41	8.9%	69	9.0%	83	7.7%
資格取得の勉強	138	5.9%	77	5.6%	60	6.7%	54	11.7%	54	7.1%	29	2.7%
面接や履歴書作成の勉強	101	4.3%	64	4.6%	36	4.0%	38	8.2%	34	4.5%	29	2.7%

表 13-2 現在の就労に向けての取り組み（複数回答）

	子ども時代保護歴				学歴カテゴリ							
	保護歴あり (N=313)		保護歴なし (N=1946)		中卒程度 (N=959)		高卒程度 (N=875)		専門学校卒以上 (N=401)			
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
アルバイト・パートの情報収集	102	32.6%	647	33.2%	294	30.7%	316	36.1%	138	34.4%		
ハローワークへの相談	28	8.9%	318	16.3%	117	12.2%	149	17.0%	80	20.0%		
福祉事務所での相談	15	4.8%	175	9.0%	87	9.1%	66	7.5%	37	9.2%		
資格取得の勉強	29	9.3%	104	5.3%	44	4.6%	54	6.2%	36	9.0%		
面接や履歴書作成の勉強	23	7.3%	77	4.0%	32	3.3%	38	4.3%	28	7.0%		

就労していないものに対して、現在の就労に向けての取り組み状況を挙げ、複数回答で尋ねた設問の結果を表 13-1,13-2 にまとめた。「あてはまる」として選択された割合を表に示す。

全体のうち、最も多く取り組まれているのが「アルバイト・パートの情報収集」で 32.9%に達した。次いで「ハローワークへの相談」が 15.1%と続いた。

性別では「ハローワークへの相談」が男性で 20.6%であり、女性の 6.8%と比べて大幅に高かった。年代別では若い世代ほど「アルバイト・パートの情報収集」が多い。また「資格取得の勉強」や「面接や履歴書作成の勉強」は若い世代では 1 割程度みられるが、年代が上がるにつれて減少する。「ハローワークへの相談」は 40 歳～54 歳が 19.0%で最多であった。子ども時代の保護歴別では、「ハ

ローワークへの相談」が保護歴なしの群では16.3%なのに対し保護歴ありの群では8.9%にとどまっている。福祉事務所での相談も相対的に少ない。学歴別では、学歴が高くなるほど「ハローワークへの相談」が増加している。

表 13-3 就労希望と就労に向けた取り組み

	いま、働きたいと思っていらっしゃいますか？									
	どんな条件でも いいから働きたい (N=107)		条件が整えば 働きたい (N=940)		いつかは 働きたい (N=810)		働きたくない (N=261)		無回答 (N=214)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
アルバイト・パートの情報収集	66	61.7%	521	55.4%	172	21.2%	6	2.3%	2	.9%
ハローワークへの相談	49	45.8%	256	27.2%	43	5.3%	3	1.1%	1	.5%
福祉事務所での相談	18	16.8%	118	12.6%	45	5.6%	12	4.6%	1	.5%
資格取得の勉強	10	9.3%	82	8.7%	42	5.2%	3	1.1%	1	.5%
面接や履歴書作成の勉強	11	10.3%	69	7.3%	17	2.1%	3	1.1%	1	.5%

就労希望別に、就労に向けた取り組みを比較した結果を表 13-3 にまとめた。「どんな条件でもいいから働きたい」では61.7%が「アルバイト・パートの情報収集」に取り組み、「ハローワークへの相談」が45.8%と続くなど、就労に向けて積極的な取り組みがみられた。「条件が整えば働きたい」という希望をもっているものも、55.4%が「アルバイト・パートの情報収集」に取り組んでおり、「ハローワークへの相談」も27.2%に達していた。一方、「いつかは働きたい」の群ではそれぞれに取り組んでいないものの割合が高く、就労に向けた現実的な取り組みはほとんど行われていなかった。

3) 業種に関する認識

次に、これまで厚生労働省「雇用動向調査」の業種分類に基づいて対象者がこれまで経験してきた職種や今後の希望職種について調査した結果を表 14 にまとめた。本項目ではそれぞれの職業経験にばらつきがあるため、設問ごとに無回答を除外して割合を算出している。また「希望職」に関する設問では複数回答方式で回答を得ている¹⁰⁾。

卒業後に最初についた職業としては、「サービス職」が22.6%、「専門技術職」が19.6%、「事務職」が18.2%。「営業職」が17.8%と比較的多様な職種についている。最も長く働いた職になると、さらに「サービス職」の割合が上がり、

表 14 これまでの経験業種と今後の希望業種¹¹⁾

	合計		専門 技術職		管理職		事務職		営業		サービス 職		保安職		農林 漁業職		運輸・ 通信職		生産・ 労務職	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
初職	1413	277	19.6	32	2.3	257	18.2	251	17.8	319	22.6	35	2.5	24	1.7	38	2.7	180	12.7	
最長職	1108	141	12.7	95	8.6	119	10.7	189	17.1	283	25.5	28	2.5	14	1.3	87	7.9	152	13.7	
直前職	786	97	12.3	65	8.3	96	12.2	105	13.4	153	19.5	55	7.0	9	1.1	68	8.7	138	17.6	
現職	303	32	10.6	12	4.0	37	12.2	48	15.8	83	27.4	9	3.0	4	1.3	16	5.3	62	20.5	
希望職	1044	122	11.7	86	8.2	151	14.5	108	10.3	177	17.0	104	10.0	90	8.6	98	9.4	108	10.3	

25.5%に達する。次いで「営業職」が17.1%と続く。生活保護を受ける直前に
ついていた職では、引き続き「サービス職」が19.5%と高いが、「生産・労務職」
も17.6%にまで上昇している。現在の職業で最も高いのは、「サービス職」の
27.4%であり、次いで「生産・労務職」の20.5%と続く。今後希望している業
種は、「サービス職」が17.5%と最も高かったが、様々な業種に幅広く希望が
みられた。

次に属性ごとの違いを検討するため、基本属性とのクロス集計を行った。学
校卒業後最初についた業種を属性ごとに比較したものを表15-1に示す。

表 15-1 基本属性別にみた初職の業種

		専門 技術職	管理職	事務職	営業	サービ ス職	保安職	農林 漁業職	運輸・ 通信職	生産・ 労務職	合計
性別	男	度数	211	19	69	119	135	26	16	28	762
		%	27.7%	2.5%	9.1%	15.6%	17.7%	3.4%	2.1%	3.7%	100.0%
	女	度数	65	13	186	130	180	8	8	39	637
		%	10.2%	2.0%	29.2%	20.4%	28.3%	1.3%	1.3%	6.1%	100.0%
年代	39歳以下	度数	47	5	41	60	104	8	3	6	292
		%	16.1%	1.7%	14.0%	20.5%	35.6%	2.7%	1.0%	2.1%	100.0%
	40～54歳	度数	115	7	118	108	128	12	4	12	562
		%	20.5%	1.2%	21.0%	19.2%	22.8%	2.1%	0.7%	2.1%	100.0%
	55～65歳	度数	113	19	97	83	86	14	17	19	551
		%	20.5%	3.4%	17.6%	15.1%	15.6%	2.5%	3.1%	3.4%	100.0%
子ども 期の保 護歴	保護歴あり	度数	36	2	23	20	41	5	5	5	162
		%	22.2%	1.2%	14.2%	12.3%	25.3%	3.1%	3.1%	3.1%	100.0%
	保護歴なし	度数	233	29	231	230	274	28	18	32	1223
		%	19.1%	2.4%	18.9%	18.8%	22.4%	2.3%	1.5%	2.6%	100.0%
学歴	中卒程度	度数	79	16	24	57	128	12	13	12	451
		%	17.5%	3.5%	5.3%	12.6%	28.4%	2.7%	2.9%	2.7%	100.0%
	高卒程度	度数	107	10	157	131	127	18	6	19	625
		%	17.1%	1.6%	25.1%	21.0%	20.3%	2.9%	1.0%	3.0%	100.0%
	専門学校 卒以上	度数	83	6	75	60	56	5	1	7	307
		%	27.0%	2.0%	24.4%	19.5%	18.2%	1.6%	0.3%	2.3%	100.0%

性別では、男性では「専門技術職」が最多で27.1%、次いで「生産・労務職」が18.2%と高かったのに対し、女性では「事務職」が29.2%で最多であり、次いで「サービス職」が28.3%と続いていた。

年代別では、55歳以上では「専門技術職」が20.5%で最多、次いで「生産・労務職」が18.7%と続くが、40～54歳では「サービス職」22.8%、「事務職」21.0%と多くなる。39歳以下では「サービス職」が最多で35.6%、次いで「営業職」が20.5%と続いており、日本の産業構造の変化との関連が反映されているようである。

子ども時代の保護歴別では大きな差がみられず、ありなしに関わらず「サービス職」が最多であり続いて「専門技術職」の順となっていた。「営業職」は保護歴がない群では18.9%、保護歴がある群で12.3%と多少差がみられた。

学歴別では、中卒程度の場合には「サービス職」が28.4%、「生産・労務職」が24.4%と群を抜いて高い。高卒程度では「事務職」が25.1%、次いで「営業職」が21.0%と続く。専門学校卒以上では「専門技術職」が27.0%、次いで「事務職」が24.4%と続き、学歴により最初についた業種に大きな違いがあることが示された。

表 15-2 基本属性別にみた最も長く勤めた業種（「最長職」）

			専門 技術職	管理職	事務職	営業	サービ ス職	保安職	農林 漁業職	運輸・ 通信職	生産・ 労務職	合計
性別	男	度数	109	81	44	83	121	23	10	80	124	675
		%	16.1%	12.0%	6.5%	12.3%	17.9%	3.4%	1.5%	11.9%	18.4%	100.0%
	女	度数	27	12	75	103	158	4	3	5	25	412
		%	6.6%	2.9%	18.2%	25.0%	38.3%	1.0%	0.7%	1.2%	6.1%	100.0%
年代	39歳以下	度数	20	6	36	45	72	6	1	5	14	205
		%	9.8%	2.9%	17.6%	22.0%	35.1%	2.9%	0.5%	2.4%	6.8%	100.0%
	40～54歳	度数	53	38	46	67	102	9	3	32	61	411
		%	12.9%	9.2%	11.2%	16.3%	24.8%	2.2%	0.7%	7.8%	14.8%	100.0%
	55～65歳	度数	65	49	37	76	108	12	8	48	73	476
		%	13.7%	10.3%	7.8%	16.0%	22.7%	2.5%	1.7%	10.1%	15.3%	100.0%
子ども 期の保 護歴	保護歴あり	度数	12	6	11	13	24	1	1	10	15	93
		%	12.9%	6.5%	11.8%	14.0%	25.8%	1.1%	1.1%	10.8%	16.1%	100.0%
	保護歴なし	度数	124	87	106	171	253	25	11	75	130	982
		%	12.6%	8.9%	10.8%	17.4%	25.8%	2.5%	1.1%	7.6%	13.2%	100.0%
学歴	中卒程度	度数	55	22	26	64	101	11	10	42	74	405
		%	13.6%	5.4%	6.4%	15.8%	24.9%	2.7%	2.5%	10.4%	18.3%	100.0%
	高卒程度	度数	59	37	56	84	123	12	1	30	56	458
		%	12.9%	8.1%	12.2%	18.3%	26.9%	2.6%	0.2%	6.6%	12.2%	100.0%
	専門学校 卒以上	度数	27	35	36	39	52	5	2	14	18	228
		%	11.8%	15.4%	15.8%	17.1%	22.8%	2.2%	0.9%	6.1%	7.9%	100.0%

性別では男子で「生産・労務職」が18.4%、次いで「サービス職」が17.9%と続くのに対し、女子では「サービス職」が38.3%と最多で「営業職」が25.0%と続く。

年代別ではどの年代でも「サービス職」が最多であるが、40歳以降では2割強であるのに対し、39歳以下では35.1%と多くなっている。

子ども時代の保護歴の有無別では、大きな差はみられなかった。

学歴別では、どの学歴でも「サービス職」が最多となっているが、中卒程度では次いで「生産・労務職」が18.3%、「営業職」が15.8%と第三位となっている。高卒程度では第2位が「営業職」が18.3%、「専門技術職」が12.9%と続く。専門学校以上では「営業職」が17.1%、「事務職」が15.8%と続く他、「管理職」が15.4%と第4位に入っている点が特徴的である。

表 15-3 基本属性性別にみた生活保護受給直前の業種（「直前職」）

			専門 技術職	管理職	事務職	営業	サービ ス職	保安職	農林 漁業職	運輸・ 通信職	生産・ 労務職	合計
性別	男	度数 %	85 16.3%	48 9.2%	45 8.6%	42 8.1%	70 13.4%	47 9.0%	7 1.3%	64 12.3%	113 21.7%	521 100.0%
	女	度数 %	9 3.6%	15 6.0%	50 20.0%	59 23.6%	80 32.0%	7 2.8%	2 0.8%	4 1.6%	24 9.6%	250 100.0%
年代	39歳以下	度数 %	11 8.6%	8 6.3%	29 22.7%	30 23.4%	34 26.6%	6 4.7%	0 0.0%	7 5.5%	3 2.3%	128 100.0%
		度数 %	30 10.5%	24 8.4%	43 15.1%	37 13.0%	55 19.3%	19 6.7%	2 0.7%	27 9.5%	48 16.8%	285 100.0%
	40～54歳	度数 %	55 15.1%	32 8.8%	21 5.8%	38 10.4%	61 16.7%	30 8.2%	7 1.9%	34 9.3%	87 23.8%	365 100.0%
		度数 %	7 9.5%	4 5.4%	9 12.2%	7 9.5%	20 27.0%	5 6.8%	2 2.7%	7 9.5%	13 17.6%	74 100.0%
	55～65歳	度数 %	84 12.1%	60 8.6%	85 12.2%	95 13.7%	131 18.8%	48 6.9%	7 1.0%	61 8.8%	124 17.8%	695 100.0%
		度数 %	39 14.5%	19 7.1%	28 10.4%	32 11.9%	53 19.7%	15 5.6%	7 2.6%	24 8.9%	52 19.3%	269 100.0%
学歴	中卒程度	度数 %	43 12.4%	24 6.9%	44 12.7%	49 14.2%	62 17.9%	28 8.1%	2 0.6%	31 9.0%	63 18.2%	346 100.0%
		度数 %	12 7.6%	20 12.7%	23 14.6%	23 14.6%	35 22.2%	11 7.0%	0 0.0%	13 8.2%	21 13.3%	158 100.0%
	高卒程度	度数 %	12 7.6%	20 12.7%	23 14.6%	23 14.6%	35 22.2%	11 7.0%	0 0.0%	13 8.2%	21 13.3%	158 100.0%
		度数 %	12 7.6%	20 12.7%	23 14.6%	23 14.6%	35 22.2%	11 7.0%	0 0.0%	13 8.2%	21 13.3%	158 100.0%
	専門学校 卒以上	度数 %	12 7.6%	20 12.7%	23 14.6%	23 14.6%	35 22.2%	11 7.0%	0 0.0%	13 8.2%	21 13.3%	158 100.0%
		度数 %	12 7.6%	20 12.7%	23 14.6%	23 14.6%	35 22.2%	11 7.0%	0 0.0%	13 8.2%	21 13.3%	158 100.0%

基本属性性別にみた生活保護受給に至った直前の業種を表 15-3 に示す。

男性では「生産・労務職」が21.7%と最多で「専門技術職」が16.3%と続くが、女性では「サービス職」が32.0%と最多で続いて「営業職」が23.6%、「事務職」が20.0%と一部の業種に偏りがみられる。

年代別では、55 歳以上では「生産・労務職」が 23.8%と最多であるのに対し、40～54 歳では「サービス職」が最多で 19.3%、「生産・労務職」が 16.8%と続く。39 歳以下では「サービス職」が 26.6%と最多、続いて「営業職」が 23.4%であり、「生産・労務職」は 2.3%と少ない。

子ども時代の保護歴の有無別ではほとんど差がみられなかった。

学歴別では、中卒程度では「サービス職」が 19.7%、「生産・労務職」が 19.3%と多かった。高卒程度では「生産・労務職」が 18.2%、「サービス職」が 17.9%と続いた。専門学校卒以上でも「サービス職」が 22.2%であり、「事務職」と「営業職」が 14.6%と並んだ。

表 15-4 基本属性別にみた現在の業種（「現職」）

			専門 技術職	管理職	事務職	営業	サービ ス職	保安職	農林 漁業職	運輸・ 通信職	生産・ 労務職	合計
性別	男	度数	16	8	9	15	32	6	3	14	36	139
		%	11.5%	5.8%	6.5%	10.8%	23.0%	4.3%	2.2%	10.1%	25.9%	100.0%
	女	度数	16	4	28	33	51	2	1	2	25	162
		%	9.9%	2.5%	17.3%	20.4%	31.5%	1.2%	0.6%	1.2%	15.4%	100.0%
年代	39歳以下	度数	10	2	20	17	29	0	0	1	5	84
		%	11.9%	2.4%	23.8%	20.2%	34.5%	0.0%	0.0%	1.2%	6.0%	100.0%
	40～54歳	度数	9	3	13	21	28	2	1	5	20	102
		%	8.8%	2.9%	12.7%	20.6%	27.5%	2.0%	1.0%	4.9%	19.6%	100.0%
	55～65歳	度数	13	7	4	9	25	7	3	10	37	115
		%	11.3%	6.1%	3.5%	7.8%	21.7%	6.1%	2.6%	8.7%	32.2%	100.0%
子ども 期の保 護歴	保護歴あり	度数	3	3	3	9	12	0	0	0	2	32
		%	9.4%	9.4%	9.4%	28.1%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%	100.0%
	保護歴なし	度数	28	9	34	39	70	9	4	16	57	266
		%	10.5%	3.4%	12.8%	14.7%	26.3%	3.4%	1.5%	6.0%	21.4%	100.0%
学歴	中卒程度	度数	10	4	11	16	27	4	2	5	28	107
		%	9.3%	3.7%	10.3%	15.0%	25.2%	3.7%	1.9%	4.7%	26.2%	100.0%
	高卒程度	度数	10	5	17	27	41	2	2	9	23	136
		%	7.4%	3.7%	12.5%	19.9%	30.1%	1.5%	1.5%	6.6%	16.9%	100.0%
	専門学校 卒以上	度数	11	1	7	5	13	3	0	2	8	50
		%	22.0%	2.0%	14.0%	10.0%	26.0%	6.0%	0.0%	4.0%	16.0%	100.0%

現在働いている業種について、基本属性別に比較した結果を表 15-4 に示す。

性別では、男性で「生産・労務職」が 25.9%、「サービス職」が 23.0%と続いた。女性では「サービス職」が 31.5%、「営業職」が 20.4%と続いた。

年代別では、39 歳以下では「サービス職」が 34.5%、「事務職」が 23.8%と続く。40～54 歳でも「サービス職」が 27.5%で最多で、続いて「営業職」が 20.6%となる。55 歳以上では「生産・労務職」が 32.2%と最多となっている。

子ども時代の保護歴の有無別では、保護歴なしの場合には「サービス職」が26.3%、「生産・労務職」が21.4%と続くのに対し、保護歴ありの場合には「サービス職」が37.5%、「営業職」が28.1%と続く。

学歴別では、中卒程度の場合「生産・労務職」が26.2%、次いで「サービス職」が25.2%と続く。高卒程度では「サービス職」が30.1%と多く、次いで「営業職」が19.9%である。専門学校卒以上では「サービス職」が26.0%、「専門技術職」が22.0%と多い。

表 15-5 基本属性別にみた今後希望している業種（「希望職」）

			専門 技術職	管理職	事務職	営業	サービ ス職	保安職	農林 漁業職	運輸・ 通信職	生産・ 労務職	合計
性別	男	度数	61	56	78	61	86	79	64	69	73	627
		%	9.7%	8.9%	12.4%	9.7%	13.7%	12.6%	10.2%	11.0%	11.6%	100.0%
	女	度数	54	26	68	42	86	20	22	24	30	372
		%	14.5%	7.0%	18.3%	11.3%	23.1%	5.4%	5.9%	6.5%	8.1%	100.0%
年代	39歳以下	度数	48	23	53	27	47	19	17	17	19	270
		%	17.8%	8.5%	19.6%	10.0%	17.4%	7.0%	6.3%	6.3%	7.0%	100.0%
	40～54歳	度数	37	30	61	37	63	36	29	39	39	371
		%	10.0%	8.1%	16.4%	10.0%	17.0%	9.7%	7.8%	10.5%	10.5%	100.0%
	55～65歳	度数	37	33	37	44	66	49	44	42	49	401
		%	9.2%	8.2%	9.2%	11.0%	16.5%	12.2%	11.0%	10.5%	12.2%	100.0%
子ども 期の保 護歴	保護歴あり	度数	28	22	31	25	29	18	14	19	22	208
		%	13.5%	10.6%	14.9%	12.0%	13.9%	8.7%	6.7%	9.1%	10.6%	100.0%
	保護歴なし	度数	93	61	118	80	145	84	73	77	84	815
		%	11.4%	7.5%	14.5%	9.8%	17.8%	10.3%	9.0%	9.4%	10.3%	100.0%
学歴	中卒程度	度数	43	32	50	45	69	46	37	44	49	415
		%	10.4%	7.7%	12.0%	10.8%	16.6%	11.1%	8.9%	10.6%	11.8%	100.0%
	高卒程度	度数	45	35	65	43	76	36	30	33	35	398
		%	11.3%	8.8%	16.3%	10.8%	19.1%	9.0%	7.5%	8.3%	8.8%	100.0%
	専門学校 卒以上	度数	26	17	31	16	28	21	20	18	19	196
		%	13.3%	8.7%	15.8%	8.2%	14.3%	10.7%	10.2%	9.2%	9.7%	100.0%

最後に、今後希望する業種を基本属性別にまとめたものを表 15-5 に示す。

性別では、男性ではどの業種にも希望が分布している。複数回答方式の設問であるため、どの職種でも良いから就職したいという対象者が一定含まれていると考えられる。女性では「サービス職」が23.1%、「事務職」が18.3%となっており、これまでに経験のある職種により多くの希望がみられる。

年代では、39歳以下では「事務職」では19.6%、「専門技術職」が17.8%、「サービス職」が17.4%となっていた。40～54歳では「サービス職」が17.0%と多いが、様々な業種に約1割ずつ分布していた。55歳以上では「サービス職」が16.5%

と最多であった。

子ども時代の保護歴別では、保護歴ありの群で「事務職」が14.9%で最多、次いで「専門技術職」が13.5%と続く。保護歴なしの群では「サービス職」が17.8%、次いで「事務職」が14.5%と続いた。

学歴別では、中卒程度で「サービス職」が最多であるが16.6%であり、他の職種にも幅広く希望がみられている。高卒程度では「サービス職」が19.1%、「事務職」が16.3%である。専門学校以上では「事務職」が15.8%、「サービス職」が14.3%、「専門技術職」が13.3%である。

以上、これまでに経験した業種と今後希望する業種を概観すると、性別・年代・学歴別に経験したことのある職種は大きく異なり、高齢者や中卒程度の場合には「生産・労務職」の占める割合が高く、女性の場合には「サービス職」や「事務職」の占める割合が高かった。一方で今後希望する職種については比較的幅広い業種に希望がみられていた。

4) 職業スキルの自己効力感

次に、職業スキルについての自己効力感を尋ねる問を設けた。職業スキルについては、健康管理、社交性、清潔感、書類作成、根気強さ、援助要請の6項目とし、4件法で回答を得た。結果を表16に示す。

表16 職業スキルの自己効力感

	できる		まあできる		あまりできない		全くできない		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア)栄養と睡眠に気をつけ体調管理を行う	564	17.9%	1361	43.2%	774	24.6%	155	4.9%	298	9.5%
(イ)愛想よく人づきあいする	632	20.1%	1323	42.0%	703	22.3%	191	6.1%	303	9.6%
(ウ)清潔感のある身なりをする	931	29.5%	1497	47.5%	351	11.1%	64	2.0%	309	9.8%
(エ)書類を丁寧に作成する	487	15.5%	1095	34.7%	895	28.4%	331	10.5%	344	10.9%
(オ)仕事に根気強く取り組む	674	21.4%	1284	40.7%	588	18.7%	225	7.1%	381	12.1%
(カ)困った時に、上司や同僚に相談する	529	16.8%	991	31.4%	790	25.1%	433	13.7%	409	13.0%

設問のうち、「できる」という回答が多かったのは「清潔感のある身なりをする」の29.5%であり、次いで「仕事に根気強く取り組む」が21.4%と続いた。逆に「全くできない」が最も多かったのは「困った時に、上司や同僚に相談する」

の 13.7%であり、次いで「書類を丁寧に作成する」の 10.5%であった。

次に、属性別に職業スキル自己効力感を比較したものを表 17-1、17-2 に示す。

表 17-1 性別・年代別にみた職業スキル自己効力感（「できる」＋「まあできる」の和）

職業スキル自己効力感	全体		性別				年齢 3 区分					
			男 (N=1758)		女 (N=1319)		39 歳以下 (N=758)		40 ～ 54 歳 (N=1043)		55 ～ 65 歳 (N=1393)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 栄養や睡眠に気をつけ体調管理を行う	1925	61.1%	1086	61.8%	815	61.8%	398	60.5%	646	61.9%	865	62.1%
(イ) 愛想よく人づきあいする	1955	62.0%	1064	60.5%	866	65.7%	435	66.1%	669	64.1%	834	59.9%
(ウ) 清潔感のある身なりをする	2428	77.0%	1314	74.7%	1079	81.8%	526	79.9%	814	78.0%	1072	77.0%
(エ) 書類を丁寧に作成する	1582	50.2%	829	47.2%	735	55.7%	403	61.2%	571	54.7%	601	43.1%
(オ) 仕事に根気強く取り組む	1958	62.1%	1103	62.7%	839	63.6%	437	66.4%	673	64.5%	835	59.9%
(ク) 困った時に、上司や同僚に相談する	1520	48.2%	838	47.7%	670	50.8%	349	53.0%	549	52.6%	611	43.9%

表 17-2 子ども時代の保護歴別・学歴別・就労有無別にみた職業スキル自己効力感（「できる」＋「まあできる」の和）

職業スキル自己効力感	子ども時代保護歴						学歴カテゴリ				就労有無			
	保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校卒 以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 栄養や睡眠に気をつけ体調管理を行う	221	55.9%	1656	62.8%	699	56.8%	812	66.1%	348	64.1%	1441	61.8%	431	74.8%
(イ) 愛想よく人づきあいする	242	61.3%	1669	63.3%	719	58.4%	807	65.7%	363	66.9%	1455	62.4%	448	77.8%
(ウ) 清潔感のある身なりをする	287	72.7%	2084	79.0%	913	74.2%	1007	82.0%	424	78.1%	1852	79.4%	519	90.1%
(エ) 書類を丁寧に作成する	208	52.7%	1347	51.1%	475	38.6%	715	58.2%	350	64.5%	1172	50.3%	374	64.9%
(オ) 仕事に根気強く取り組む	239	60.5%	1682	63.8%	716	58.2%	816	66.4%	368	67.8%	1410	60.5%	499	86.6%
(ク) 困った時に、上司や同僚に相談する	186	47.1%	1299	49.2%	528	42.9%	637	51.9%	306	56.4%	1108	47.5%	381	66.1%

性別に比較をすると「できる」と答えているものの割合は男女でほとんど同じか、女性の方が高い。特に「清潔感のある身なりをする」では女性で 81.8%と高い。

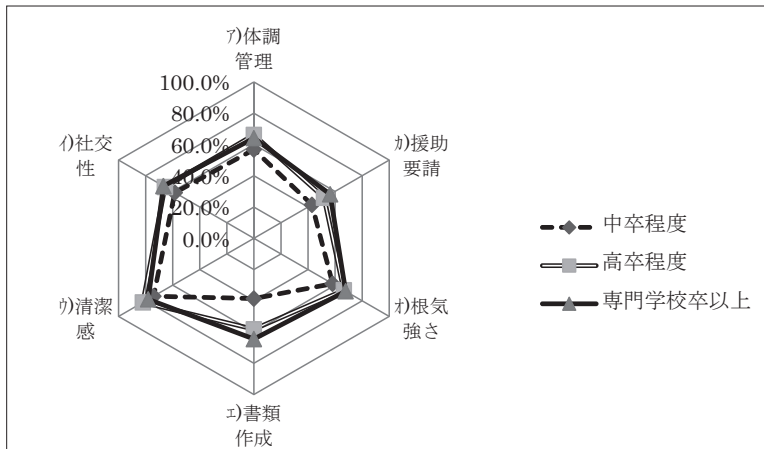
年代別では、いくつかの項目で年代を重ねるごとに低下傾向がうかがわれる。39 歳以下→40 ～ 54 歳→55 歳以上の順に表示していくと、「愛想よく人づきあいをする」では 66.1% → 64.1% → 59.9%、「書類を丁寧に作成する」では 61.2% → 54.7% → 43.1%、「困った時に上司や同僚に相談する」で 53.0% → 52.6% → 43.9% となっており、年代と共に社交性や事務能力、援助要請スキルの自信が

失われていくことが示される。

子ども時代の保護歴の有無では大きな違いはないが、やや「栄養や睡眠に気をつけ体調管理を行う」が保護歴ありで 55.9%、保護歴なしで 62.8%、「清潔感のある身なりをする」が保護歴ありで 72.7%、保護歴なしで 79.0%と差がみられた。

学歴別では中卒程度の自己効力感が全体的に低い。表中の数値を分かりやすく提示するため、学歴別の職業スキル自己効力感をレーダーチャートで図2に示した。なお、各項目名は短くまとめている。専門学校卒以上と高卒程度ではほぼ同じ程度の自己効力感がみられるが、点線で示した中卒程度の場合、すべての項目において他の2群より割合が低くなっており、全体的に「できる」の回答割合が少ない。とくに書類作成では 38.6%、援助要請では 42.9%と大きく他を下回っている。

図2 学歴別にみた職業スキル自己効力感



最後に現在の就労の有無別では、当然ではあるが現在就労しているものの方が全体的に自己効力感は高くなっている。最も低いものが書類作成で 64.9%、続いて援助要請 66.1%であり、現在就労している者では過半数が職業スキルについて一定の自己効力感を持っている。それに対し、就労していないものでは

全体的に低く、援助要請の項目は 47.5%、書類作成も 50.5%と特に低くなっている。

5) 職業選択意識

職業を選択する際に重視する価値意識について把握する項目を設定した。ここでは、収入の良さ、時間の融通、達成感、社会性の 4 項目を設定し、「とても大切」から「全く大切でない」の 4 段階での評価を求めた。結果を表 18 に示す。

表 18 職業選択の際に重視すること

	とても大切		まあ大切		あまり大切でない		全く大切でない		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 収入が良いこと	894	28.4%	1425	45.2%	311	9.9%	60	1.9%	462	14.7%
(イ) 時間の融通がききやすいこと	993	31.5%	1360	43.1%	294	9.3%	53	1.7%	452	14.3%
(ウ) 達成感・やりがいがあること	1059	33.6%	1313	41.7%	266	8.4%	51	1.6%	463	14.7%
(エ) 人や社会とのつながりに恵まれること	1181	37.5%	1175	37.3%	278	8.8%	76	2.4%	442	14.0%

全体的な回答のうち、「とても大切」が最も多かったのは「人や社会とのつながりに恵まれること」で 37.5% に達していた。『困った時に相談する』スキルに自信がないものが比較的多いこともあり、人間関係に恵まれることを重視しているのだろう。次いで「達成感・やりがいがあること」が 33.6%、「時間の融通が聴きやすいこと」が 31.5% と続いた。

次いで、属性別に見た職業選択意識を表 19-1、19-2 にまとめた。職業選択の際の価値観としていずれの項目も大切であると考ええるものは 7 割強に達していた。性別で比較すると「時間の融通がききやすいこと」は男性で 71.0%であったのに対し女性では 81.9%と高くなっていた。また「収入が良いこと」でも男

表 19-1 全体・性別・年代別にみた職業選択意識（「とても大切」＋「まあ大切」の和）

	全体		性別				年齢 3 区分					
			男 (N=1758)		女 (N=1319)		39 歳以下 (N=758)		40 ～ 54 歳 (N=1043)		55 ～ 65 歳 (N=1393)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 収入が良いこと	2319	73.6%	1247	70.9%	1048	79.5%	549	83.4%	834	80.0%	923	66.3%
(イ) 時間の融通がききやすいこと	2353	74.7%	1248	71.0%	1080	81.9%	574	87.2%	835	80.1%	933	67.0%
(ウ) 達成感・やりがいがあること	2372	75.3%	1317	74.9%	1030	78.1%	532	80.9%	859	82.4%	970	69.6%
(エ) 人や社会とのつながりに恵まれること	2356	74.7%	1288	73.3%	1042	79.0%	536	81.5%	835	80.1%	970	69.6%

表 19-2 子ども時代の保護歴別・学歴別・就労有無別にみた職業選択意識
（「とても大切」＋「まあ大切」の和）

	子ども時代保護歴				学歴カテゴリ						就労有無			
	保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校 卒以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 収入が良いこと	316	80.0%	1957	74.2%	874	71.0%	947	77.1%	425	78.3%	1767	75.8%	508	88.2%
(イ) 時間の融通がききやすいこと	316	80.0%	1989	75.4%	881	71.6%	967	78.7%	433	79.7%	1784	76.5%	520	90.3%
(ウ) 達成感・やりがいがあること	302	76.5%	2023	76.7%	881	71.6%	988	80.5%	431	79.4%	1809	77.6%	505	87.7%
(エ) 人や社会とのつながりに恵まれること	301	76.2%	2009	76.2%	881	71.6%	973	79.2%	430	79.2%	1799	77.1%	505	87.7%

性の 70.9%と比べて女性では 79.5%とより高かった。女性の場合、子育てや介護役割を担っているものも一定含まれており、時間の融通は重要な要件であると考えられる。

年代別では 39 歳以下ではすべての項目が 8 割を超えていたが、特に「時間の融通がききやすいこと」が 87.2%と最多であった。40～54 歳でもすべての項目が 8 割に達していた。55 歳以上になると、逆にどの項目も 7 割に達しなくなり、「達成感・やりがいがあること」や「人や社会とのつながりに恵まれること」が 69%強で最多であった。高齢になると、職業選択に対して自分から条件を挙げづらく感じるものが増えるのかもしれない。

子ども時代の保護歴別では、ほとんど差がみられず、「収入が良いこと」や「時間の融通がききやすいこと」で保護歴ありの場合には 80.0%に達していたのに対し、保護歴なしの群では 75%程度にとどまっていた。

学歴別では、中卒程度の場合すべての項目で 71%程度にとどまっており、高卒以上と比べて低くなっていた。

就労の有無別では、就労していないものでもすべての項目で 75%を超えていたが、就労しているものではさらに高く全項目で 87%を超えており、特に「時間の融通がききやすいこと」は 90.3%を超えていた。

6) 仕事を通じて期待すること

職業選択の際に重視する項目は、社会的望ましさに回答が影響されうると考

えられたため、職業観を把握するためにさらに「仕事を通じて期待すること」に関する項目を設けた。これは仕事を通じて社会関係の中で何を得たいと考えているか、得られると考えているのかに関する見通し観を評価することを意図している。項目には社会関係で得られることを前提に、他者からの学び、社会貢献、自信獲得、他者からの肯定的評価を設定し、「とても期待する」から「全く期待しない」までの4段階評価とした。結果を表20に示す。

表 20 仕事を通じて期待すること

	とても期待する		まあ期待する		あまり期待しない		全く期待しない		無回答	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 他人との出会いを通して色々なことを学ぶ	726	23.0%	1250	39.7%	670	21.3%	203	6.4%	303	9.6%
(イ) 他人の役に立っていると実感する	574	18.2%	1239	39.3%	741	23.5%	254	8.1%	344	10.9%
(ウ) 自信がつき失敗を恐れなくなる	444	14.1%	1172	37.2%	877	27.8%	298	9.5%	361	11.5%
(エ) 人から喜ばれたり褒められる	625	19.8%	1154	36.6%	772	24.5%	264	8.4%	337	10.7%

「とても期待する」が最多だったのは「他人との出会いを通して色々なことを学ぶ」で23.0%であった。一方、最も少なかったのは「自信がつき失敗を恐れなくなる」で14.1%にとどまっていた。社会関係の中で学んだり評価されたりすることへの期待は多少はあるものの、それを通じて自信を獲得するという経験に乏しいように思われる。

「仕事に期待すること」の設問に「とても期待する」「まあ期待する」と答えたものの和の割合を基本属性別に表21-1、21-2にまとめた。

性別では、男性より女性の方が全ての項目で「期待する」と回答した割合が高い傾向がみられた。特に「他人の役に立っていると実感する」が男性では

表 21-1 全体・性別・年代別にみた仕事に期待すること（「とても期待」＋「まあ期待」の和）

	全体		性別				年齢3区分					
			男 (N=1758)		女 (N=1319)		39歳以下 (N=758)		40～54歳 (N=1043)		55～65歳 (N=1393)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 他人との出会いを通して色々なことを学ぶ	1976	62.7%	1074	61.1%	881	66.8%	494	75.1%	713	68.4%	763	54.8%
(イ) 他人の役に立っていると実感する	1813	57.5%	976	55.5%	820	62.2%	466	70.8%	695	66.6%	645	46.3%
(ウ) 自信がつき失敗を恐れなくなる	1616	51.3%	886	50.4%	717	54.4%	423	64.3%	599	57.4%	591	42.4%
(エ) 人から喜ばれたり褒められる	1779	56.4%	949	54.0%	812	61.6%	478	72.6%	677	64.9%	617	44.3%

表 21-2 子ども時代の保護歴別・学歴別・就労有無別にみた仕事に期待すること
（「とても期待」＋「まあ期待」の和）

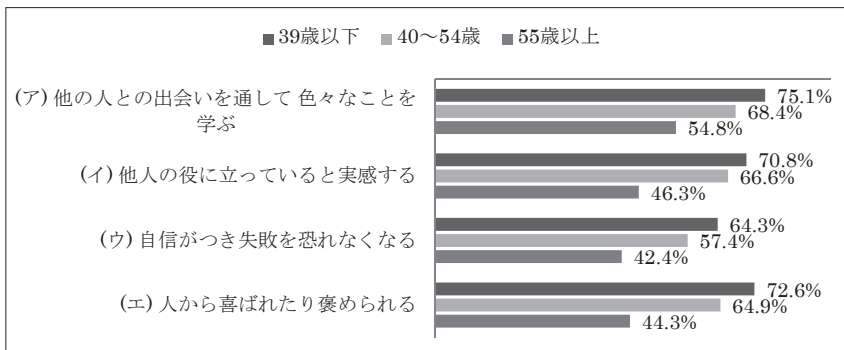
	子ども時代保護歴				学歴カテゴリ						就労有無			
	保護歴あり (N=395)		保護歴なし (N=2638)		中卒程度 (N=1231)		高卒程度 (N=1228)		専門学校 卒以上 (N=543)		不就労 (N=2332)		就労あり (N=576)	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
(ア) 他の人との出会いを通して色々なことを学ぶ	279	70.6%	1658	62.9%	727	59.1%	792	64.5%	391	72.0%	1426	61.1%	438	76.0%
(イ) 他人の役に立っていると実感する	240	60.8%	1533	58.1%	625	50.8%	751	61.2%	381	70.2%	1291	55.4%	434	75.3%
(ウ) 自信がつき失敗を恐れなくなる	219	55.4%	1366	51.8%	560	45.5%	662	53.9%	339	62.4%	1187	50.9%	348	60.4%
(エ) 人から喜ばれたり褒められる	249	63.0%	1494	56.6%	626	50.9%	731	59.5%	361	66.5%	1274	54.6%	415	72.0%

55.5%であったのに対し女性では62.2%、「人から喜ばれたり褒められたりする」が男性では54.0%であったのに対し女性では61.6%となっており、女性には仕事を通じて他者からの肯定的な評価、他者貢献を期待しているものが多かった。

年代別では、すべての設問において年代と共に期待する割合が低下していた。分かりやすく示すために結果を図3にグラフ化する。特に59歳以上では、三つの項目で期待する割合が5割を下回っている。生活保護受給に至るまでの職業経験や社会関係の中で失望を重ねてきたであろう中高年の受給者における、社会関係への期待の薄さがしのばれる。

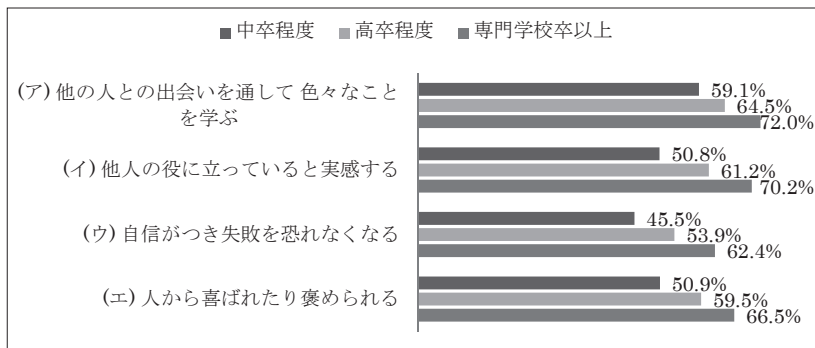
子ども時代の保護歴別では、あまり差はみられなかったが、保護歴のある群

図3 年代別に見た仕事を通じて期待すること（とても期待する＋期待するの割合）



では「人から喜ばれたり褒められる」が63.0%であるのに対し、保護歴のない群では56.6%にとどまっていた。生活保護世帯の貧困の再生産に取り組む上では、特に他者からの肯定的な評価が得られるような職業に結びつくことが重要であると考えられた。

図4 学歴別に見た仕事を通じて期待すること（とても期待する+期待するの割合）



学歴別では、すべての設問において学歴が高くなるほど期待する割合が高くなっていた。分かりやすく示すために結果を図4にグラフ表示する。「他の人との出会いを通じて色々なことを学ぶ」については中卒程度では59.1%であるが、専門学校卒以上では72.0%に達している。「他人の役に立っている」は中卒程度では50.8%だが専門学校卒以上では70.2%である。他の項目でも10%以上の差がついており、中卒程度の場合には仕事を通じて社会関係に期待するものが決して多くないことが示唆された。

4. 結論

本報告は生活保護受給者世帯における稼働年齢層を対象とした悉皆調査の基礎報告書である。回収率は5割に達しなかったものの、生活保護受給者の自己評価を明らかにした貴重な資料である。特に、自殺率の高さ¹²⁾など、メンタルヘルス面での課題の多さを指摘されることの多い被保護者を対象にメンタルヘ

ルス面まで踏み込んだ調査を実施した点で重要性が高いと考える。

基本的な属性項目についての比較からは、性や年代、学歴によって被保護者の過去の心身の健康状況や社会関係、就労体験や職業観が大きく異なることが明らかになった。本報告では基礎的な資料としての位置づけから、二変数の関連のみ検討しているが、今後、さらにこれらの属性要因の相互関係を踏まえた多変量解析などを行い、職業観に対する複数の属性の影響をより詳細に検討していく必要があるだろう。

いずれにせよ、生活保護受給者は性、年齢、学歴等から、多くの複合的な社会的不利を経験しているといえよう。特に年代を重ねるほど、学歴達成が低いほど、他者との関係に期待を失い、援助要請が困難になっていくと考えられる。つまりこれらの人々の社会参加や就労継続支援を考える上では、他者との肯定的な相互作用の体験が不可欠であり、ケースワーカーや支援員は単にサービスメニューを提供するだけではなく、肯定的な評価を言語的にも非言語的にも伝えたり、他者との交流を肯定的に意味づけしあったりするような質的な面での支援の提供が不可欠であると考えられる。現在進められている就労意欲喚起事業もその一助となると考えられ、今後も政策展開とその効果評価について関心を抱き続けることが必要であろう。

(注)

- 1) 厚生労働省「平成21年版厚生労働白書」1部第2章第6節より。通知並びに厚生労働白書においては「自立阻害要因」という用語を使用している。しかし、社会福祉法第3条に規定する福祉サービスの基本的理念の観点に立ち、支援対象者が自ら主体的に「自立」に取り組む際の目標（課題）という趣旨で、厚生労働省社会・援護局保護課で開催された研究会で討議し作成した自立支援の手引では「自立に向けた課題」としている（生活保護自立支援の手引き編集委員会編（2008）『生活保護自立支援の手引き』中央法規出版より）
- 2) 東京都板橋区、首都大学東京 共編「生活保護自立支援プログラムの構築—官学連携による個別支援プログラムの plan.do.see」ぎょうせい,2007
- 3) この間、岡部は卓・稲葉昭英・長沼葉月等自立支援プログラムの策定等に協力している。
- 4) 「中卒程度」は、中学校卒業に高校中退を合わせたもの。高卒程度は、高校卒業と

- 専門学校や短大や大学を中退したものを合わせたもの。専門学校卒以上は、専門学校卒業、短大卒業、大学卒業、大学院中退ないしは大学院修了を合わせたものである。
- 5) 「就労有無」は、「いまお仕事で収入を得ていますか」に「はい」と答えたものを「就労あり」、「いいえ」と答えたものを「不就労」としたものである。
 - 6) Kessler RC, Andrews G, Colpe LJ, Hiripi E, Mroczek DK, Normand SL, Walters EE, Zaslavsky AM.(2002) Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychol Med.* 32(6):959-76.
 - 7) 古川壽亮・大野裕・宇田英典・中根允文 (2003) 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究『平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究報告書 (主任研究者川上憲人)』
 - 8) 全 10 項目を用いるのが K10 である。K6 の場合には 2,4,5,8,9,10 の項目のみを用いる。
 - 9) 川上憲人, 近藤藤子, 柳田公佑, 古川壽亮. 成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究. 『平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業)「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」総括・分担研究報告書』2005.
 - 10) 本設問の回答方式が複雑であったため、欠損値が比較的多くこのような結果の妥当性には疑問が残る。業種に関する認識についてはより分かりやすい選択方式の質問紙設計により改めて調査が行われることが望ましい。
 - 11) 業種の分類については厚生労働省の「雇用動向調査」の分類に基づき、以下の通りとした。専門技術職 (機械・電気技術者、土木建築技術者、教員、医師など)、管理職 (会社・団体の役員、部長、課長など)、事務職 (総務・人事係・広報係・事務係、受付、秘書、出荷配送係、書記など)、営業・販売職 (百貨店・スーパー・商店の販売、仕入れ交渉、卸売販売員など)、サービス職 (ホームヘルパー、理容・美容師、飲食店業、接客業、寮やビルの管理人など)、保安職 (警備員、守衛、交通指導員など)、農林漁業職 (農業、林業、漁業、畜産業など)、運輸・通信職 (電車・バスや重機などの運転手、無線・電波などの通信技術者、郵便配達人など)、生産・労務職 (左官、配管工、内装仕上工など各種工務、土木作業者、清掃業など)。また表内では略記してあるが、初職は「学校卒業後初めて就いた職」、最長職は「今までで一番長く働いた職」、直前職は「生活保護を受ける直前の職」、現職は「現在の職」、希望職は「今後希望する職」として尋ねた。
 - 12) 厚生労働省社会援護局保護課では、平成 23 年度第 4 回社会保障審議会生活保護基準部会のため「生活保護における自殺者数について」と題する参考資料を作成し、生活保護世帯における自殺率の高さを指摘した。